# 福岡大学病院における抗菌薬の使用状況の推移

渡辺憲太朗[1)2)]　山口　覚[1)3)]　高田　徹[1)4)]
志村　英生[1)5)]　石川　崇彦[1)4)]　西田　武司[1)6)]
原賀　勇壮[1)7)]　坂本　真美[1)8)]　衛藤　由美[1)8)]
橋本　丈代[1)8)]　浅田　律子[1)8)]　秀島　信恵[1)8)]
田辺　里子[1)8)]　馬島　紘世[1)9)]　野中　敏治[1)9)]
塩塚　昭一[1)9)]　吉村　尚江[1)10)]　川島　博信[1)10)]
恵良　文義[1)10)]　神原　豊[1)11)]　武田　誠司[12)]
安仲加公子[13)]　田中　美紀[3)]　金森　勝俊[1)14)]

[1)] 感染対策室，[2)] 呼吸器科，[3)] 小児科，[4)] 血液糖尿病科，[5)] 第一外科，[6)] 救命救急センター，[7)] 形成外科，[8)] 看護部，[9)] 薬剤部，[10)] 検査部，[11)] 病理部，[12)] 腎臓内科，福岡大学病院，[13)] 微生物学，福岡大学医学部，[14)] 事務部，福岡大学病院

**要旨**：2000年４月から2004年３月までに福岡大学病院の各部門で使用されている注射用抗菌薬の総使用量を年次別，各部門別に比較し，全国的な抗菌薬の使用頻度と比較した．また MRSA と緑膿菌の薬剤感受性を最小発育阻止濃度法（MIC）で検討した．2003年度の病院全体で使用する注射用抗菌薬の総使用量は2000年度と比較して約10％減少している．その中でもペニシリンの使用量が増加していることが特記される．福岡大学病院の抗菌薬の使用状況は全国的な傾向と同様であったが，当院では CEZ の使用量がとくに多いことが分かった．また2003年１月と2004年８月を比較する限り MRSA と緑膿菌に対する各薬剤の抗菌力は保たれていた．抗菌薬の濫用は耐性菌の出現と深い関連がある．病院での抗菌薬の消費傾向や検出された病原菌の感受性動向を調査することは今後の抗菌薬の適正使用に欠かせない．

**索引用語**：抗菌薬，MRSA，緑膿菌，耐性菌